

にはなをもてあそび香を執しさけをあいす。○中さけはもろこし南蠻はあぢはひをこゝろみ、九州のねりぬき、加州の菊花、天野の出群なるをもとめ、薄と濁醪にいたるまで、一酌に千憂を散じ、あるひは春衣をおきぬひて醉をつくし、これを以て風寒をさけて、稀なる齡にもこえたり。○
略

〔二老略傳〕雪山先生村北在江戸の間は、潔病甚しく萬の物を洗ひきよめたるに、長崎にかへりて、後、十六年の間沐浴せず、爪きらず、半風子身にあまりたり、尤産を破りたるゆゑ、至て貧窮なり、然といへども崎人尊敬して、名いふ人なし、先生とのみ人々稱したり、酒價なき時は寫字をなして、酒家につかはす、文字の數は、字幅の格好に隨て酒をおりたり、雪山先生の書は、唐船に價を貴くゆゑに、酒家に利有りしとなり、唐にても雪山先生の書を褒稱したり。

〔假名世說〕君修云、日本近來の學者、皆酒量あり、仁齋は其中下戸なり、東涯も上戸なり、闇齋、淺見重次郎も上戸なり、徂來は下戸、南郭、春臺も上戸なり、

〔紫芝園漫筆〕徳翁以風流自許、人亦與之、予謂徳翁有不風流者三焉、善飲而惡酒一也、不好夜坐二也、不喜乘舟三也、

〔先哲叢談七〕平玄中、字子和、小字源右衛門、號金華。○中

金華好酒痛飲、徂徠送其之三河序曰、子和飲酒傲睨、深慕伯倫青蓮之爲人、紫芝園漫筆曰、何充善飲、劉惔常云、見何次道飲酒、使人欲傾家釀、予於平子和亦云、南郭記墓曰、飲酒慷慨、時或激烈至泣下、

〔先哲叢談續編十一〕内田頑石

頑石不欲婚官、人說之婚、則曰、一身之外、亦復何須、便有婦吾恐劉伶之見捐酒毀器矣、人說之官、則曰、山野之性、不愜元冠、其真率自放如此、

頑石性嗜酒、酣暢之餘、脫遺世埃、飲多益溫、醉甚愈克、杯鐙盤壘、不去坐側、無朝無暮、常帶酒臭。○中